

2026年5月24日 ペンテコステ拝

説教題『神の救いはすべての民に』使徒言行録28章23～31節

主任牧師 加藤 誠

「この神の救いは異邦人に向けられました。彼らこそ、これに聞き従うのです」(使徒言行録28章29節)

イエス・キリストが復活の命をあらわされたイースターから 50 日目の日曜日、ペンテコステの日に、十字架の主の愛の息吹である聖霊が弟子たちの上に降り「教会」が生まれました。彼らは扉を開けて、主イエスの喜びの知らせを世界に向けて語り始めたのです。ここに大切なことがあります。弟子たちが扉を閉じて彼らだけで祈っている間は「教会」とは呼ばれず、彼らが扉を開けて人々の間に出かけていく中で「教会」とされたことです。このことは今日ここに集められている私たちの「祈りの矢印」を問うています。私たちの祈りは内向きの矢印で終わっていないか。私たちの祈りは外向きの矢印、人々の間に出かけていく祈り、「教会の祈り」になっているかと。

使徒言行録は、主イエスの福音の種がパレスチナの片隅からローマ帝国全体に届けられていく様子を描いていますが、その広がり方は聖霊の不思議に満ちています。聖霊は小さく弱虫だった弟子たちを新たに作り変え、憎しみと憤りに満ちていたパウロを新たに作り変えます。聖霊は弟子たちを「旧約のユダヤ民族中心主義」から解放し、「すべての民を救う神の希望のビジョン」に生きる群れに変えていきます。旧約から新約へ。すべての民と救いの喜びを分かち合う教会の誕生。それが使徒言行録の物語です。

使徒言行録1章で、主イエスは天に戻られる前に弟子たちにこう語られました。「あなたがたの上に聖霊が降るとき、ユダヤとサマリアの全土、さらには地の果てまで、わたしの証人となる」と。しかしこの言葉を聞いた弟子たちは驚きと反発を覚えたことでしょう。「イエス様、御冗談でしょう。わたしたちがどうやって地の果てにまで福音を伝えられるでしょうか？」と。そもそもガリラヤの漁師や徴税人だったペトロたちは、隣の国に出かけたことはあっても、それ以上の遠い外国に出かけたことなどありませんでしたし、外国人に語るだけのギリシャ語の素養もありませんでした。復活した主イエスが一緒に居てくださるならともかく、「主イエスなし」で自分たちだけで外国に行って福音を語る姿など、とても想像できなかったことでしょう。

実際ペトロたちにできたのはペンテコステの時にエルサレムに来ていた外国暮らしのユダヤ人に福音を語ったこと。そして彼らが一番遠くまで出かけていけた場所はシリアのアンティオキアでした。距離的にはエルサレムから 600 キロです。ローマまでは陸路で約 4000 キロですから、はるかに及びません。しかしペトロたちが聖霊の力を受けて閉じられていた扉を開けて一步を踏み出し、600 キロ先のアンティオキアまで行った。そのことが重要だったのです。その小さなさざ波の一步をきっかけに、ペトロたち以外の弟子たちによる新しい波が起こされていきました。例えばエルサレムに

来ていた外国育ちのユダヤ人（外国語を話せる）たちは、ペトロたちから受け取った福音を遠く外国にまで届けていきました。また驚くべきことに最初キリスト者を迫害していたパウロが異邦人に福音を語る者とされていきました。ペトロたちがすべてを担ったのではない。ペトロたちは自分にできる精一杯をした。その小さなさざ波の一步が次の波を呼び起こし、福音の種は世界に持ち運ばれていったのです。朝の祈祷会である方が言われました。「地の果てとは地図上の遠い場所ではない。わたしには無理と思える場所。それが地の果てだ」と。わたしにとって無理と思える場所に向かう小さな一步。その一步を主は祝して福音伝道の大きな波を起こしていかれるのです。

今朝の28章は使徒言行録の最後。とうとう福音がローマに運ばれた箇所ですが、そこに至るまでも聖霊の不思議が満ちています。先週の礼拝は、パウロの乗った船が嵐に遭い、14日間も地中海をさまよった場面でした。聖書地図を見ると、クレタ島でほんの少しだけ移動するつもりが激しい嵐で航行不能になり、嵐の中を流されに流され辿り着いたのがローマの近くのマルタ島でした。パウロたちは嵐の中で死ぬような目にあったわけですが、実際には神さまの御手の中でローマ近くまで持ち運ばれていたのです。私たちも嵐に遭遇して「もう無理だ!」とすべてを投げ出したくなる時がある。けれども私たちの旅において福音を告げ知らせる目的が明確であるならば、神は嵐の中をその目的に向けて持ち運んでくださるのです。ただただ聖霊の不思議です。

今朝の28章でパウロはローマのユダヤ人たちに対して一生懸命に主イエスの福音を語っています。パウロは熱く熱く語ったでしょうが、それでも彼の言葉を受け入れない人たちがいた。ふと思いました。パウロの言葉を聞いた何割くらいの人はその喜びの知らせを受け入れたのだらうと。パウロは語るたびに多くの反発を受け、嘲笑され、憎しみさえ受けた。よくパウロはめげないで語ることができたなあと感服します。それは結果を主に委ねていたからではないでしょうか。わたしたちは目に見える成果をつい求めがちですが、パウロは日々最善を尽くし、あとは主の御手に委ねていった。そうでなければ牢獄の中で福音を語り続けることなどできません。

使徒言行録は28章で終わっていますが、29章以降はそのパウロたちからバトンを受けた私たちに委ねられています。十字架の主の愛の息吹（聖霊）は、今日も教会を新たに造りかえ続ける炎の息吹です。今の世界は、莫大な富や武器をもつ国のリーダーたちが、自国の安全と利益のために他国への侵略を正当化し、「敵」を罵倒する言葉であふれ、分断と対立がますます深まっています。しかしそのような世界にあって、主イエスは今日も十字架に御自身の体を引き裂かれながらも私たちのために執り成し、私たちを神の真実の愛につなげ続けておられます。その十字架の主は今、私たち教会に問いかけています。富と武力を礼賛する人の声に埋もれて沈黙し、分断と対立を肯定していくのか。それとも、十字架の主の愛の息吹を受けて、自分の足で立ち上がり、主の愛と和解、平和の働きに参与していくのか。このとき聖書から「すべての民を救う神の希望のビジョン」を受け取り、一人ひとりの祈りを集めていきたいのです。